

# 1 はじめに

お互いの未来に乾杯

中熊秀喜

大田喜一郎教授の後任として、平成 15 年 6 月 1 日付で輸血・血液疾患治療部に着任し、8 月からは集学的治療・緩和ケア部の部長を兼任しています。大田先生のもと和歌山県および近畿の血液診療の要として活躍してきた実績を考え責任の重さを痛感しています。同時に、造血幹細胞移植、血液癌、造血不全疾患などの血液診療に対する県民の膨大なニーズを知り、その中で荷重労働に喘ぎつつ耐えている診療現場を目の当たりにし唖然としました。就任直後から 5 か月以上かけて内外の多くの意見を伺い、智慧を借り、診療の効率化ならびに血液専門医の増員を図ってきました。11 月から病床を 5 階西に一本化して病床管理を簡素化し、また血液専門の診療と教育と研究に実績のある古賀 震先生を助教授として迎え、さらに外来に血液内科専属ナースを配置して頂きました。大学病院に期待される高度専門診療、教育、研究を常に実現するには、研修医を含め医師の増員への働きかけ、血液専門診療を任せる関連病院の確保、診療の効率化を一層進める必要があります。診療体制も改善の余地があり、血液・腫瘍科、緩和ケア部、輸血部という体制が実態を反映しており、外からも理解が得られやすいと考えて実現をめざして行きます。

さて、患者さんの苦しみを共有し、訴えから得られる情報をもとに研究を進め、成果を患者さんへ還元し医療の質の改善につなげていく姿勢が大学病院における臨床研究の基本であると考えています。そこで私は致命的造血不全と白血病進展を特徴とする前白血病の研究に携わり造血不全が免疫抑制療法で改善すること、また白血病細胞が免疫による駆除を免れて拡大し発病をもたらすことを突き止めてきました。研究をさらに発展させて成果を世界へ発信すると同時に、臨床応用をはかり安全な造血幹細胞移植および画期的な癌免疫療法の実現に繋がりたいと考えています。幹細胞は膠原病や固形癌の治療、血管新生による血行改善、遺伝子治療への利用も期待できるため、それを支える研究も重要です。血液癌や造血不全など頻度の高い血液疾患に対する高度専門診療、加えて社会性の高いエイズなど HIV 感染症に対する拠点病院としての活動も充実させたいと思います。輸血療法における安全性の追究や適正使用の実現も大切な課題で

す。緩和ケアの要望は高く積極的に支援したいと思います。

医療はサービス業であり顧客である患者さんの満足度で評価されます。望まれる医療とは、患者本位の医療、質の高い医療、安全な医療です。そのために少なくとも「設備の充実、生涯学習、徹底したチーム医療」が求められます。チーム医療には、お互いを知り自由に意見交換ができる場が大切と捉えて、診療打合わせ、歓送迎会、花見、医局旅行、忘年会などの共同開催を試みたいと思います。その一つ今年の忘年会はおかげさまで盛況でした。モットーは「元気に、仲良く、明るく」、一人一人が「自分に何が最も期待されているのか」を考え自ら積極的に行動し職場を盛り上げて頂きたいと思います。多くの若い方々の参加を奨励し、多彩な領域で将来を担う人材に育ててほしいと期待しており「自ら考え自ら行動する医療人」の育成に支援を惜しみません。一見多難な船出も「小さく産れて大きく育つ」の諺のごとく、未来志向で活力のある誇れる教室になると私は確信しております。そこで、お互いの輝く未来を祝って乾杯しましょう。

なお、この年報は活動実績の集計にとどまらず、お互いを知ることにも使え、また第3者からの客観的評価を受ける資料にもなり、活動の改善に活かせる共有の宝物です。最後に、この年報作成を含め多忙な医局秘書業務を笑顔でこなしている岩淵典子さんと東 恵美さんに心から感謝します。

平成15年12月26日

## 2 教室現況

### (1) 教室員

血液内科 教授	中熊秀喜
助教授	古賀 震
助教授	岡本幸春 (集学的治療・緩和ケア部)
助手	片山紀文
臨床研究医	阪口 臨
研究生	原 樹里
診療医	栗本美和 (7月1日～9月30日)
	浜 喜和 (1月1日～3月31日)
大学院生	なし；出向 なし；留学 (国内、海外) なし
秘書	岩淵典子、東 恵美
輸血部 主任	廣瀬 哲人、畠中恒子
副主査	松浪美佐子、神藤洋次
医療技師	東 み幸

### (2) 役割・責任体制 (血液内科医局)

医局長 (古賀：医局行事、慶弔・渉外、人権・同和研修委員)  
診療 (古賀：入退院、当直表・日誌、カルテ、治験、レセプト、危機管理)  
教育 (中熊)、卒後研修委員 (片山)  
研究 (中熊)  
他：薬事委員 (片山)、救急・集中治療連絡委員 (片山)、薬説明会 (阪口)

### (3) 人事異動

教授	定年退職	大田喜一郎 (3月31日)
	新任	中熊 秀喜 (6月1日)
助教授	辞職	津田 忠昭 (6月30日)
	新任	古賀 震 (11月1日)
秘書	退職	畑中都世子 (8月31日)、池宮 理沙 (8月31日)
	採用	岩淵 典子 (9月10日)、東 恵美 (10月1日)
輸血部副主査	転出	橋本安貴子 (4月7日)、転入 神藤洋次 (4月8日)
医療技師	転出	後垣内由里 (4月7日)、転入 東 み幸 (4月8日)

### 3 臨床実習

平成 15 年 12 月～平成 16 年 7 月 2 日

輸血・血液疾患治療部（血液内科）								
集合場所：入院病棟 5階西（内線 3751）								
日付	9	10	11	12	13:30	14	15	16
月	オリエンテーション (中熊教授)	造血幹細胞移植とは (岡本助教授) 集学的治療・緩和ケア部			症例の割当 (古賀助教授)		入院患者の廻診 (中熊教授)	症例学習
火	輸血について (中熊教授)	10:30 症例学習			血液検査の読み方 (古賀助教授)		15:00 輸血部実習 (廣瀬主任)	症例学習
水		外来・内科診察 (中熊教授)				凝固・線溶の把え方 (古賀助教授)		症例学習
木		血球形態を学ぶ (中熊教授)				感染症(HIV,血液疾患) (岡本助教授) 集学的治療・緩和ケア部		症例学習
金	症例学習	9:30 血液疾患の化学療法を学ぶ (片山助手)				レポート発表会 (古賀助教授)		レポート 完成/ 提出

※ 臨床実習の日程は、輸血・血液疾患治療部が第1週目で、血液浄化センターが第2週目です。

## 4 主な活動内容

### (1) 学術講演会

#### 1) 国内講演会

中熊秀喜：「がんは免疫でなおるか、腫瘍免疫の動向」、平成 14 年度第 3 回日本医師会生涯教育講座、3 月 8 日、熊本市

山縣俊之、月山淑、岡本幸春：当科における肺癌患者に対する在宅酸素療法の現状、第 8 回日本緩和医療学会総会、6 月 27、28 日、千葉

中熊秀喜：「がんは免疫でなおるか、がん免疫の新しい動向」、第 121 回和歌山県医師会内科医会学術講演会および和歌山県立医科大学第二内科同門会（共催学術講演会）、8 月 23 日、和歌山県立医科大講堂

中熊秀喜：「前白血病としての PNH の分子病態」、教授就任記念講演、9 月 17 日、和歌山県立医科大講堂

中熊秀喜：「前白血病としての発作性夜間血色素尿症の分子病態」、和歌山血液疾患懇話会、10 月 18 日、新宮市

中熊秀喜：「たかが貧血、されど貧血」、和歌山市医師会内科医会学術講演会、11 月 8 日、和歌山市

中熊秀喜：「がんは免疫でなおるか、癌免疫療法の動向」、マリスト医師会学術講演会、11 月 22 日、福岡市

#### 2) 海外または国際講演会

Nakakuma H: Expansion of PNH cells by NK cell selection. The Duke Symposium on PNH. May 16-17, 2003, Durham, NC, U.S.A.

Rosse WF, Nakakuma H: Guidelines for diagnosis and management of PNH. PNH Interest Group Meeting, December 05, 2003, San Diego, CA, U.S.A.

## (2) 学会および研究会

### 1) 国内学会

古賀 震：「救急領域の DIC-止血系分子マーカー」、第 1 回血液・血管フォーラムミニシンポジウム、4 月 25 日、津市

古賀 震、民本重一、中原邦彦、櫻井錠治、松田道生：「新しい分子マーカー・Soluble Fibrin(SF)による SIRS 関連の凝固異常を伴った肺炎と通常の肺炎の鑑別が可能か?!」、第 4 回日本検査血液学会総会、7 月 6 日、京都市

古賀 震、中原邦彦、櫻井錠治、松田道生：「新しい分子マーカー Soluble Fibrin (SF)の過凝固状態から DIC 症例における診断、病態解析、治療への有用性」、第 65 回日本血液学会総会、8 月 28 日～31 日、大阪市

古賀 震：「CML 症例に対する ST157I と G-CSF 併用の意義」、第 45 回日本臨床血液学会総会、8 月 28 日～31 日、大阪市

古賀 震、民本重一、松田道生：「新しい凝固の分子マーカー可溶性フィブリン(SF)の有用性-SIRS 関連の血液凝固異常を伴った肺炎と通常の肺炎の鑑別診断、治療の効果判定の切り札!-」、第 41 回日本社会保険医学会総会、10 月 20 日～21 日、仙台市

民本重一、古賀 震、鳥居久二、茂見康博、田中真一郎、村上聖一、竹口東一郎：「乳腺にみられた髄外造血症例」、第 41 回日本社会保険医学会総会、10 月 20 日～21 日、仙台市

古賀 震：「血栓形成と生命予後の新しい予知マーカー」、第 43 回日本臨床科学会年会臨床化学専門部会、シンポジウム：「疾患をリアルタイムに解析する新たな分子マーカー」、10 月 29 日～31 日、広島市

古賀 震、民本重一、中原邦彦、新谷雄一、櫻井錠治、松田道生：「可溶性フィブリン (SF) は SIRS 関連の凝固異常肺炎と通常の肺炎の鑑別、病勢診断に有用」

第50回日本臨床検査医学会総会、10月29日～31日、広島市

古賀 震：「日本臨床検査医学会／日本 DIC 研究会での討論結果ならびに今後の方向性について」、第26回日本血栓止血学会学術集会、コンセンサスシンポジウム「DIC」、11月27日～29日、東京都

古賀 震、民本重一、松田道生：「SIRS 関連の凝固異常を伴った肺炎と通常の肺炎の鑑別、病勢診断に有用なマーカー可溶性フィブリン」第26回日本血栓止血学会学術集会、11月27日～29日、東京都

北本康則、今村隆寿、福井博義、古賀 震：「尿トロンビン測定の意義」、第26回日本血栓止血学会学術集会、11月27日～29日、東京都

河野 浩、松岡 均、白橋顕彦、河野文夫、魚住公浩、鈴島 仁、古賀 震、山下清、田村和夫：「Febrile Neutropenia に対する初期治療無効例における注射用 Ciprofloxacin の有用性に関する検討」、第51回日本化学療法学会西日本支部総会、12月4日～5日、福岡市

寛山 隆、前田豊樹、中崎有恒、栗田 良、三原田賢一、前田るい、中村幸夫、川口辰哉、中熊秀喜、谷 憲三郎：「変異型 (Pig-A 欠損) K562 細胞の巨核球系細胞への分化異常と RNA 結合タンパク質 Musashi 1 による分化能の回復」、第26回日本分子生物学会年会、12月10日～13日、神戸市

## 2) 海外または国際学会

古賀 震：Analysis of clotting activation in human glomerulonephritis and pathophysiological role of thrombin in the disease. 3rd General Meeting of the International Proteolysis Society, November 10-13, Nagoya

Shin Koga, Shigekaze Tamimoto, Kunihiro Nakahara, Yuichi Shintani, George Sakurai, Michio Matsuda. (Intr. by Kazuo Kawasugi) : Clinical Usefulness of Measurement of Soluble Fibrin Monomer-Fibrinogen Complex in Patients with Disseminated Intravascular Coagulation Syndrome(DIC) and Serious Condition.

第 45 回米国血液学会 (ASH), 12 月 6 日～9 日 San Diego, CA (Blood 102:95b, 2003)

Shin Koga, Shigekazu Tamimoto, Kunihiko Nakahara, Yuichi Shintani, George Sakurai, Michio Matsuda. (Intr. by Kazuo Kawasaki) : A Novel Molecular Marker of Soluble Fibrin Monomer-Fibrinogen Complex Is Quite Useful for Differential Diagnosis of Pneumoniae Associated with SIRS and Coagulopathy, and Simple Pneumoniae.

第 45 回米国血液学会 (ASH), 12 月 6 日～9 日 San Diego, CA (Blood 102:117b, 2003)

Shin Koga, Shigekazu Tamimoto, Kyuuji Torii, Touichirou Takeguchi, Teruomi Shimamura. (Intr. by Kazuo Kawasaki) : Case Report: Sonographic Demonstration of Extramedullary Hematopoiesis in Breast Aspirates.

第 45 回米国血液学会 (ASH), 12 月 6 日～9 日 San Diego, CA (Blood 102:156b, 2003)

### 3) 研究会

阪口 臨、濱 喜和、下野千草、原 樹里、片山紀文、津田忠昭、大田喜一郎、岡本幸春：「同種骨髄移植の 2 症例」、第 1 回和歌山造血細胞療法研究会  
2 月 6 日、和歌山市

古賀 震、民本重一、松田道生：「新しい凝固の分子マーカーSoluble Fibrin(SF)の臨床的意義-SIRS から MOF 症例までの診断、病勢把握、治療への有用性について」、第 3 回 TTM フォーラム、3 月 21 日、東京都

阪口 臨、原 樹理、片山紀文、岡本幸春、古賀 震、中熊秀喜：「Follicular Lymphoma の 2 症例」、第 1 3 回 Young Oncologist Conference、11 月 28 日、和歌山市

### (3) 学術論文

#### 1) 和文原著、 該当なし

#### 2) 英文原著

Murakami Y, Siripanyapinyo U, Hong Y, Kang JY, Ishihara S, Nakakuma H, Maeda Y, Kinoshita T: PIG-W is critical for inositol acylation but not for flipping of glycosylphosphatidylinositol-anchor. *Molecular Biology of the Cell*, 14:4285-4295, 2003

Nishimura J, Kanakura Y, Ware R, Shichishima T, Nakakuma H, Ninomiya H, DeCastro CM, Hall S, Kanamaru A, Sullivan KM, Mizoguchi H, Omine M, Kinoshita T, Rosse WF: Clinical course and flow cytometric analysis of PNH in the USA and Japan. *Medicine*, in press

Kunihiko Nakahara, Yumiko Kazahaya, Yuichi Shintani, Kensuke Yamazumi, Yutaka Eguchi, Shin Koga, Hideo Wada, Michiko Matsuda : Measurement of soluble fibrin monomer-fibrinogen complex in plasmas derived from patients with various underlying clinical situations. *Thrombosis Haemostasis* 89:832-836, 2003

Yamagata T, Okamoto Y, Ota K, Katayama N, Tsuda T and Yukawa S : A Case of Pulmonary Intravascular Lymphomatosis Diagnosed by Thoracoscopic Lung Biopsy. *Respiration* 70:414-418, 2003

#### 3) 和文総説

堀川健太郎、川口辰哉、中熊秀喜：発作性夜間血色素尿症（PNH）における変異発生の造血環境。 *Annual Review 血液* 2003、50-57, 2003

古賀 震：～感染症合併 DIC の早期診断～トロンビン・アンチトロンビン測定が有用。 *Medical Tribune*、36：9, 2003

#### 4) 英文総説

Nakakuma H, Kawaguchi T: Pathogenesis of selective expansion of PNH clones. Int J Hematol, 77:121-124, 2003

#### (4) 著書 (単行本、シリーズもの含む)

中熊秀喜：発作性夜間ヘモグロビン尿症。今日の治療指針 2004 年版 編者：山口 徹、北原光夫、pp461-462、医学書院

古賀 震： $\alpha_2$ プラスミンインヒビター。医学大事典 [総集編] 2003 年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p68、医学書院

古賀 震：APTT 試薬。医学大事典 [総集編] 2003 年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p238、医学書院

古賀 震：血液凝固阻止法。医学大事典 [総集編] 2003 年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p702、医学書院

古賀 震：血漿カルシウム再加時間。医学大事典 [総集編] 2003 年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p717、医学書院

古賀 震：繊維素沈着。医学大事典 [総集編] 2003 年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p1420、医学書院

古賀 震：繊維素溶解能検査。医学大事典 [総集編] 2003 年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p1420、医学書院

古賀 震：トロンボ試験。医学大事典 [総集編] 2003 年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p1802-1803、医学書院

古賀 震：フィブリノゲン定量法。医学大事典〔総集編〕2003年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p2112、医学書院

古賀 震：プラスミン・ $\alpha_2$ プラスミンインヒビター複合体。医学大事典〔総集編〕2003年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p2167、医学書院

古賀 震：プロトロンビン消費試験。医学大事典〔総集編〕2003年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p2194、医学書院

古賀 震：硫酸プロタミン試験。医学大事典〔総集編〕2003年度版 編者：伊藤正男、井村裕夫、高久史磨、p2533-2534、医学書院

#### (5) その他の印刷物（研究成果報告集、学会抄録集、寄稿文など）

中熊秀喜：がんを攻撃する免疫療法。まいらいふ、熊本日々新聞社発行、7(55):20-21, 2003

#### (6) 受賞等

古賀 震：新しい凝固の分子マーカー可溶性フィブリン(SF)の有用性 SIRS 関連の血液凝固異常を伴った肺炎と通常の肺炎の鑑別診断・治療の効果判定の切り札！。第41回日本社会保険医学会総会、学会賞受賞、10月21日

#### (7) 研究費、助成金、寄付金等

文部科学省科学研究費補助金 基盤研究C2、平成15年度(分担)、「再生不良性貧血におけるクローン性疾患の発生機序」、中熊秀喜(代表者：堀川健太郎)

#### (8) 支援研究会など

和歌山造血細胞療法研究会

和歌山血液疾患懇話会

和歌山血液疾患座談会

和歌山悪性リンパ腫研究会

和歌山悪性腫瘍研究会

南近畿血液病フォーラム

近畿血液学地方会

和歌山緩和ケア研究会

和歌山血液疾患患者家族の会「ひこぼえ」

**(9) 海外出張**

中熊秀喜: 第 45 回米国血液学会総会 (ASH)、December 6-9, 2003, San Diego, CA, U.S.A.

中熊秀喜: The Duke Symposium on PNH. May 16-17, 2003, Durham, NC, U.S.A.

## 5 診療実績

(1) 入院 患者総 (のべ) 数 (一時退院後を含む)	319 名
退院 患者総 (のべ) 数 (一時退院を含む)	339 名
(2) 外来	
患者総 (のべ) 数	6,396 名
新患者数	197 名

### 入院患者疾病別分類 (入院のみ, 重複あり)

#### 1) 白血病

急性骨髄性 (単球性等)	28
急性リンパ性	7
慢性骨髄性	11
慢性リンパ性	4
他	0

#### 2) 骨髄異形成症候群 (MDS) 5

#### 3) リンパ腫瘍

非ホジキンリンパ腫	52
ホジキンリンパ腫	5
その他	
成人 T 細胞白血病/リンパ腫	8
免疫芽球性リンパ節症	2
皮膚リンパ腫	2
末梢 T リンパ腫	1

#### 4) 形質細胞腫瘍

多発性骨髄腫	31
ベンスジョンズ (BJP) 型	2
マクログロブリン血症	0
形質細胞性白血病	0

5) 血球減少症（造血不全含む）		
再生不良性貧血		7
巨赤芽球性貧血（ビタミン B12、葉酸欠乏等）		1
血小板減少（特発性血小板減少性紫斑病等）		7
好中球減少症		2
その他の貧血（鉄欠乏性など）		2
6) 溶血疾患		
自己免疫性		2
発作性夜間血色素尿症（PNH）	0	
先天性（球状赤血球症など）		0
細血管傷害性（HUS/TTP など）		0
他		
溶血性貧血		2
7) 凝固・線溶異常		
播種性血管内凝固症候群（DIC）		4
凝固因子異常症（血友病など）		0
他		
出血傾向		1
8) 骨髄増殖性疾患		
真性多血症		1
血小板増多症		0
他		
好酸球増多症		1

9) 感染症	
HIV 感染症 (エイズなど)	2
結核症	3
その他	
敗血症など	1
10) その他	
造血幹細胞移植ドナー入院	2
肺炎	1
腎不全	1
便秘	1
末梢性顔面神経麻痺	1
嘔吐症	1
(4) 死亡	45
(5) 剖検 (率)	1 (2.2%)

## 6 リーダーレポート

輸血・血液疾患治療部助教授

古賀 震

和歌山医大に着任してから約2ヶ月が過ぎた今、少しほっとしています。この4ヶ月間はこれまでの私の人生の中でこれまでに出会ったことのない超過密スケジュールを経験することができて貴重な1ページであったと感じています。前病院での診療（外来・入院患者さん）に関する全般的整理と引き継ぎ及び書類作成、これまでの研究データの整理、学会の準備と発表、引越し準備全般、新病院でのセットアップ、科研費の申請などでありました。また、多数の送別会も大変嬉しかったです。10月末には体重減少と口唇ヘルペスに見舞われ、この年になって再度新しい環境に慣れるには楽観的な私にとっても予想以上にハードでありました。

現在、中熊教授を中心として当教室の医局、外来、病棟、研究、教育（学生講義・臨床実習）などの全般的基盤準備に追われていますが、徐々にかつ着実に進んでいます。現在、医局長、病棟長、外来医長を兼任していますが、手探りの状態で毎日奮闘しています。具体的には教育面で卒後研修カリキュラムの作成や医学生のクリニカルクラークシップの導入への対応、臨床実習（ポリクリ）の見直し、臨床講義のガイドライン作りなどです。診療面では外来、病棟で医師、看護師が働きやすく、フットワークのよい職場となるように少しずつお役に立とうと努力しています。又、造血幹細胞移植（Auto/Allo）も今度さらに増加する傾向にあるので関連病院との役割分担が重要と思われれます。研究面も新しい立ち上げが必要と考えています。中熊教授は当科を関西または日本の血液学のメッカにしたいと強く希望されています。当科から全国、世界に新しい情報発信ができるように思っています。当地はATLの症例も多く、ATL、悪性リンパ腫や血液凝固線溶系の臨床研究はこれまで以上に飛躍できると期待しています。一方で白血病、造血不全、骨髄腫などに対する研究も必要であり、人手不足に悩んでいます。このような中で我々とともにがんばって行こうとやる気のある方はぜひ私までご連絡下さい。喜んで相談に乗ります。今後も今まで以上の皆様の御支援・ご協力をお願い致します。

## 集学的治療・緩和ケア部助教授

岡本 幸春

集学的治療・緩和ケア部に所属して2年半になりますが、何時までたっても寄り合い所帯のまま、元の所属の影を引きずったまま今年も過ぎてしまいました。部としての仕事をするには各自忙しすぎてなんら成果を得られないままでした。しかし、血液内科に新しい中熊教授を迎え、当部の部長も兼務されることになり、血液内科に新風を吹き込まれているように停滞気味であった当部にも活力が生まれ、現状を打破し良い方向に向かうでしょう。各自の活動状況は月山先生は、いつもの様にマイペースで緩和ケアをしっかりと支えてくれ、山縣先生も自分のペースで仕事を続けていました。その反面、私は何をやったのかわからない1年で、このため片山先生や阪口先生のために何も応援できなかったのが残念でした。

学問的な活動は出来ませんでした。診療面では昨年、骨髄移植の認定病院に指定され、骨髄移植財団からドナー骨髄を提供して頂けるようになり和歌山県でも骨髄バンクを介した同種骨髄移植が受けられるようになりました。何故、和歌山の県民が和歌山県内で移植を受けられないのかと県会でも取り上げられ問題になったようですが、ようやく県民に貢献できるようになりました。以後何例かバンク骨髄を頂き、片山先生が責任者となり骨髄移植を進めています。逆に、他府県のレシピエントのために県内のボランティアドナーの骨髄採取も依頼を受けるようになりました。今年はドナー骨髄採取を2例行いましたが、1例を紹介したいと思います。紹介するのはドナーさんへのレシピエントの奥さんからのお礼の手紙です。(勿論、骨髄バンクを介した遣り取りで個人が特定されることはなく、2回だけ許されています。この手紙は感激されたドナーさんが私に見せてくれました。) 一部を記します。

「さてこの度は主人の為に骨髄を提供して頂きまして心より感謝申し上げます。見ず知らずの他人の為に大切なお時間を割き また、痛みを伴うであろうことを承知し、それでも同意して頂きましたドナー様の勇気と暖かいお心に対しまして 只々頭が下がります思いです。主人が発病したのは、下の子供が産まれます約10日程前の事でした。その時は正直申してこれから先どうすれば良いのか私自身思い悩み途方に暮れも致しましたが、今は主人も私も病気と正面から向き合い日々戦っております。主人には是非小さな二人の子供のため、そしてご厚情を頂戴致しましたドナー様の為にも病気に打ち勝ち、一日

も早く元気になって欲しいと強く願っております。そして近い将来必ずドナー様へ 元気になりました のご報告のお手紙を差し上げられますことを希望してやみません。—————」手紙にはもう少しお礼の言葉が綴られており、レシピエントであるご主人からもお礼の手紙が同封されています。

我々にとっては日常機械的に採取して、受け取りに来られた先生に手渡すという単純な手順の仕事ですが、この様な手紙を前にすると、その裏にある病気と必死に戦い骨髄移植に希望を託している患者、家族へ、ドナーからの尊い善意の受け渡しに少しでも貢献できていることに喜びを感じます。同時に、真摯な気持ちで間違いなく渡せるように努力しなくてはとの思いが強まります。いずれにしても、これは血液内科のスタッフだけでは出来ない事で、手術場で活躍してくれる小児科の医師、麻酔科の医師、病棟看護師その他の方々の協力が不可欠であり深謝すると共に、今後とも手を携えて患者のためになる医療を推進していくつもりです。

## 5階西病棟看護師長

向井 まゆみ

平成15年は病棟として、大きな出来事が2つあった。一つは6月集学的治療・緩和ケア部が太田喜一郎部長から中熊秀喜部長に引き継がれたこと。もう一つは10月輸血・血液疾患治療部が8階東病棟から5階西病棟に移動し、集学16床と輸血・血液内科9床となったことである。私にとっては28年勤務のなかで5回目の「引越し」となった。無事引越しを終了出来たことに安堵し、スタッフの協力に「感謝」でした。

病棟管理状況のなかで、「緩和の稼働率」「無菌室の稼働率」が病棟の繁忙度に影響を及ぼすことは14年のデータで明らかになっていたが、15年も同じ結果となった。二つの要因がピークであった5月が超過勤務時間数も最も多かった。年間通して繁忙度が高かったのは5月であり、新人4名を加えてすぐの時期であった。そのため患者の安全・安楽を確保するため、スタッフの緊張度も高かったと思われる。病棟稼働率は平成14年は8月のみ76%と落ち込んだものの、年間80%以上を維持していた。それと比較すると、15年は6月以降70%台が続く結果となり、病院経営の視点からは良い結果と言えなかった。

看護研究への取り組みは「化学療法を受けた患者の倦怠感に対する炭酸ガス入り足浴の有効性」を検討した。良い結果が得られ、日常看護ケアの一つとして取り入れている。また、「アロマテラピーによる準無菌室入室患者のリラクゼーション効果」を検討し、結果については平成16年2月に発表予定。緩和では、「終末期がん患者の療養場所について、患者と家族の意見が別れた事例」「鎮静中に行った褥創処置、清潔ケアへの取り組み」「頻回に鎮痛剤を希望した患者のトータルペインへのかかわり」の3事例をまとめ発表の機会を得た。個人の研究では北端副看護師長は「超過勤務に影響を及ぼす看護師の認識」を日本看護研究学会で発表。日下看護師は「終末期患者に対し看護師が看護ケアに達成感を感じる」との研究に取り組んでおり、結果に期待したい。

緩和ケア病棟では恒例のお誕生祝いその他、キャンドルサービスや病室での絵画展を開くことができたが、16年は更なる企画・運営に取り組みたいと思っています。

輸血部主任  
廣瀬 哲人

4月の異動で神藤洋次さん、東み幸さんが当部のスタッフとなり、松浪美佐子さん、畠中恒子さん、それに私（廣瀬）の5名で新年度を迎えた。ルーチンワークの傍ら診療医の輸血検査実習（血液型、交差適合試験）が二年ぶり再開され、慌ただしい新年度がスタートした。6月には新しい教授（輸血・血液疾患治療部部長）の中熊秀喜先生をお迎えし、11月には助教授の古賀震先生が着任された。

今年、念頭においた輸血業務取り組み五項目を振り返ってみると1. 輸血の安全性を確保するため、改善策を講ずること、（輸血システムをカスタマイズし、より安全性の高いシステムとなった。）2. 院内廃棄血の減少に努力すること、（手術での濃厚血小板の返品が昨年を多少上回ったが、廃棄血が全輸血用血液製剤の1%以内で良好であった。）3. 自己血輸血を啓蒙し、その推進に各診療科の協力を要請すること、（自己血輸血は年々漸増している。今年は実施患者数は昨年を下回ったが、使用単位数は数十単位伸び、一人当たりの貯血単位数が増加した。）4. 造血幹細胞採取、分離、保管の件数を増加させるべく医師をサポートすること、（自家造血幹細胞移植：採取7件、移植3件、同種造血幹細胞移植：採取9件、移植8件で、昨年に比べ減少であった。）5. 輸血副作用については重篤な副作用報告もなく、平穩に経過した。

最後に、輸血・血液疾患治療部として最初の年報（1号）であるので、輸血部の変遷を少し記載します。来年（平成16年）は輸血部が設立されて10周年、輸血・血液疾患治療部と名称を変更して5年。一区切りの年です。いままで試行錯誤を繰り返しながら、中央部門としての土台作りをし、まがりなりにも部門の一つとしてようやく体裁をなしてきた。人員は設立当初大田助教授（当時）と2人でのスタートでしたが、5年後血液内科との合併で新しい輸血・血液疾患治療部が誕生し、人員も徐々に増加し現在の5名体制となった。この10年間は輸血部の基礎作りであったように思います。今後新部長の元、輸血療法的安全性の確立、輸血用血液製剤の適正使用の推進（特に自己血輸血の推進）、細胞治療の支援など、さらなるエネルギーの結集が必要となる。

**7 主な来訪者（セミナー講師など）**

竹縄忠臣（東京大学医科学研究所教授）

川口辰哉、石原園子、畑 裕之（熊本大学第二内科）

**8 寄稿文（提案、苦情、関連病院便り、感謝状、留学先からなど）**

なし